

男女共同参画推進センター

第2号

News Letter

男女共同参画推進センター講演会

2015年5月29日、首都大学東京のダイバーシティ推進室元室長の江原由美子氏をお招きして、「なぜ、いま改めて男女共同参画なのか? ~首都大学東京での取り組みを中心に~」とのテーマで講演会を開催しました。

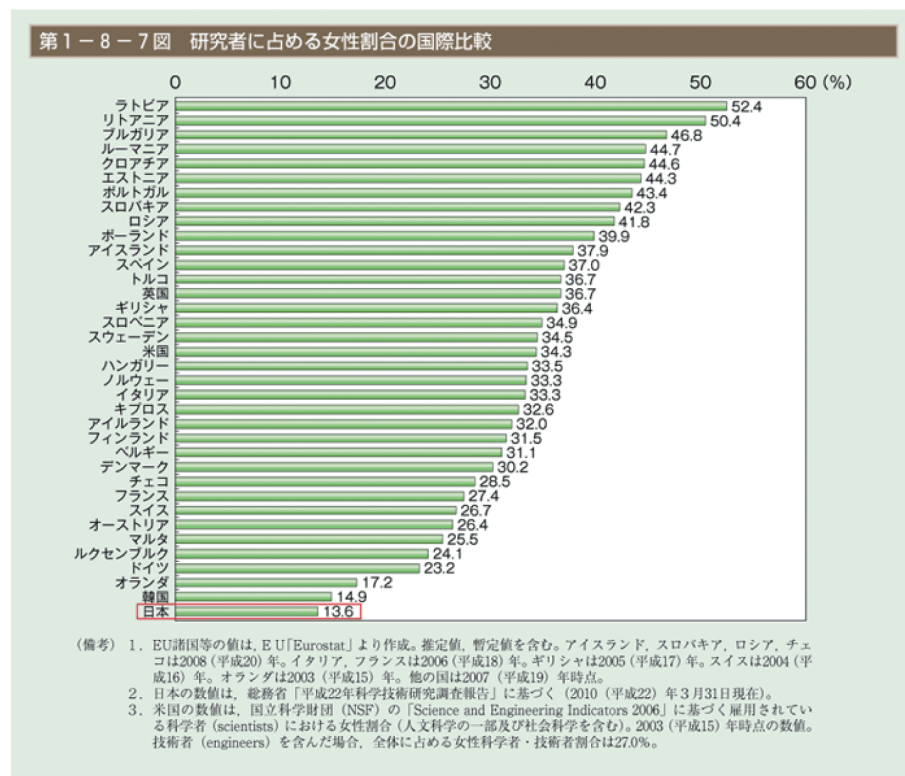
はじめに、大学を取り巻く環境の変化による男女共同の現状について述べられ、グローバル化が進む現代の日本社会では、雇用の喪失、少子化、人口減少といった問題が深刻化し、格差が拡大する中、大学の環境変化として、男子の大学進学率増加の鈍化と女子の4年生大学進学率の急激な増加、少子化と大学数の増加による定員確保の困難化、留学生受け入れの期待などを挙げられました。このような中であって、大学は男女共同参画とダイバーシティへの対応に迫られていると述べられました。



首都大学東京
ダイバーシティ推進室元室長
江原由美子氏

次に、男女共同参画とダイバーシティの概念と現代日本の歴史に触れつつ、首都大学東京におけるダイバーシティ施策の導入と経緯について紹介されました。女性研究者比率の低迷やワーク・ライフ・バランス施策の不在、国際化の遅れなどの課題がある中、ダイバーシティを推進し、性別やジェンダーを多様性の一つのあり方と位置づけ、「首都大学東京ダイバーシティ推進基本計画」を2011年に発表し、学長のもとに「ダイバーシティ推進室」を設置し、体制を整えてスタートしたと述べられました。

少ない日本の女性研究者比率



内閣府男女共同参画局「男女共同参画白書平成23年版 第1-8-7図 研究者に占める女性割合の国際比較」

次ページにつづく

「ダイバーシティ推進室」では、最初の事業として、2011年に「女性研究者研究活動支援事業」に応募、採択され、理系の学部等における専任教員採用者における女性比率を30%（直近3年間の採用者における女性比率は約5%であった）に上昇させることを目標に掲げ、事業終了時の2013年度には、理系の専任教員採用者における女性比率31.0%を達成したことを紹介。

また、首都大学東京全体として、10年後の2020年には女性教員比率を15%（2011年時点）から20%を目指すこと、自然科学系分野女性教員（任期なし）の職階別割合の上昇などを掲げた。さらにダイバーシティの観点から、外国籍の女性教員や女子留学生に対する情報提供について、女性研究者研究支援制度利用応募書類の英語化や留学生向け女性の健康セミナーの資料を作成したことが紹介されました。

推進の大きな力として、学長のコミットメントを指摘され、具体的に、学長による①「男女共同参画推進、障がいがある構成員支援、文化的多様性を持つ構成員支援等のダイバーシティ推進施策を着実に実行していくこと」の宣言、②「理系3学部・系の新規採用者に占める女性比率を30%にする」という目標達成に関する協力要請、さらに③ダイバーシティ推進室フォーラム「学術分野における女性リーダー育成」で学長が職階の上だった女性教員と対談し、数値目標の達成に向けて積極的に取り組むことを表明したことを挙げられました。今後の課題として、障がいのある構成員支援、セクシャル・マイノリティの支援とともに、人文社会系でのダイバーシティの理解の推進を挙げられていました。



花見センター長



馬場学長

事業終了後の目標の達成度

(首都大学東京)

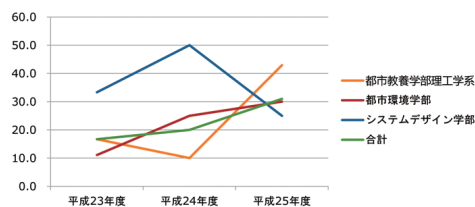
【目標①】

理系の学部・系において、専任教員採用者における女性比率を30%に上昇させる。

【達成状況】

平成25年度、とくに女性教員比率が低い理系3学部・系の専任教員採用者における女性比率は31.0%に達し、目標①を達成した。

理系3学部・系における専任教員採用者の女性比率



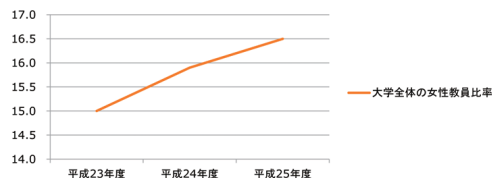
【目標②】

大学全体として、10年後（平成32年度）には女性教員比率20%を目指す。

【達成状況】

平成23年度には大学教員全体に占める女性教員比率は15%であったが、平成25年度は16.5%、平成25年度末には17.1%に達し、目標の達成に向けて予想を上回る伸び率を示している。

大学全体の女性教員比率



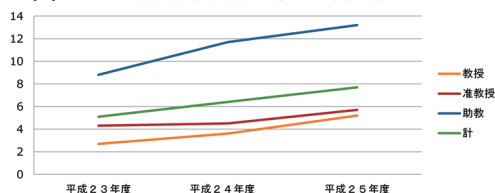
【目標③】

自然科学系分野女性教員（任期無し）の職階別割合の上昇

【達成状況】

助教の比率が最も高くなっているが、教授、准教授ともに伸びている。とくに教授は平成23年度は2.7%であったが、平成25年度は5.2%に達し、最も高い伸び率を示している。

(%) 自然科学系分野女性教員（任期無し）の職階別割合



介護の基本と備え

創価大学 看護学部 東森由香准教授

2015年11月6日、中央教育棟 AW402 教室において介護セミナーが開催されました。今回、介護セミナーを開催した背景には、高齢者の増加に伴う認知症や要介護者の増加、介護老人施設の不足や老老介護など超高齢社会に向かう日本の現状があります。仕事と家庭生活の両立に向けたワーク・ライフ・バランスを考える上で、親の介護をどうするかについて考えることはとても重要です。

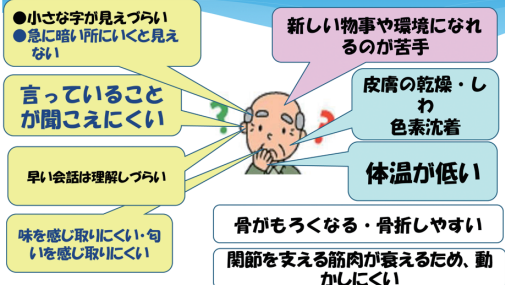
講師は、本学看護学部看護学科の東森由香准教授（日本認知症ケア学会代議員）で、「介護の基本と備え」のテーマで講演をしていただきました。

まず、「加齢」による身体的変化の特徴について説明があり、高齢者は転倒を起しやすくなること、また転倒は寝たきりの要因となり、その5割は家庭内で起きているため生活環境を整えることが予防に繋がることが示されました。また、認知症の症状については、中核症状（記憶障害、見当識障害、失語、失行、失認、実行機能障害など）や行動心理症状（暴言、徘徊、暴力、大声など）が挙げられ、行動障害・問題行動と捉えられる行動心理症状は、介護者のかかわり方で改善することを強調して説明されました。



次ページにつづく

高齢者の身体的変化の特徴



加齢による聴覚への影響って？！

- 40歳前後から高音域の聴力が徐々に低下し、70歳代以降では著しく低下する
- 低・中音域の聴覚閾値は、高音域よりも緩やかに低下する
- 音を聞き取り区別する力が低下する
- 日常会話の速度についていけない
- 小さい音は聞こえにくく、大きな音は耳に不快に響く



寝たきりの要因である転倒を予防する

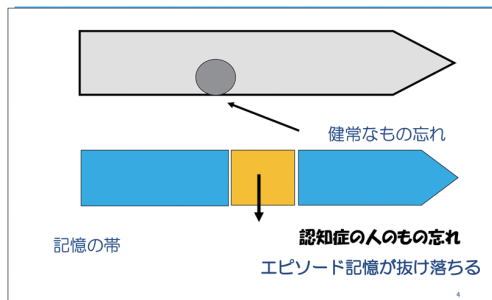
- 65歳以上の高齢者による転倒事故の約5割は家庭内で起きている

「コードに足が引っかかり転倒し頭を打撲した」
「敷居をまたごうとして躓き骨折した」

- ①本人の意向を確認する
そもそも本人が何をしたいのか
- ②環境を整える
段差をなくす・滑らない素材にする
手すりをつける・履物をそろえる・
照明の工夫
- ④転倒しやすい薬剤を検討する



普通の物忘れと認知症の違い



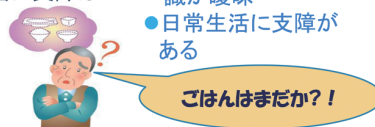
加齢によるもの忘れと認知症の違い

加齢によるもの忘れ

- ヒントを与えられると思い出せる
- 時間や場所は正しく認識できる
- 日常生活に支障はない

認知症のもの忘れ

- 今あったことを忘れる
- ヒントを与えられても思い出せない
- 時間や場所などの認識が曖昧
- 日常生活に支障がある



認知症の症状とは

中核症状

記憶障害	新しい情報を学習したり、以前に学習した情報を想起したりする能力の障害 短期記憶障害・体験全体を忘れる
見当識障害	時間、場所、人物の見当をつける能力の障害
失語	言語の障害
失行	運動機能が損なわれていないにもかかわらず動作を遂行する能力の障害
失認	感覚機能が損なわれていないにもかかわらず、対象を認識または同定する能力の障害
実行機能障害	計画を立てる、組織化する、順序立てる、抽象化することの障害



さらに、実際に介護の現場で起きている事例を通じて、介護の基本方針や介護者の心構え、介護される側と介護する側の両者の負担を軽減するための工夫などについて解説していただきました。特に、介護にまつわる5つの問題として、暮らし（親は誰とどこに住むのか）・お金・人間関係・能力（親の状況により必要な援助は何か）・仕事（介護との両立）が挙げられ、職場の介護休業制度を活用して介護者や家族が無理をし過ぎないで介護を続けられる方法を選び、介護と仕事のバランスをとることが重要であるとの見解が示されました。また、介護保険制度のしくみや介護保険サービスを利用するまでの手続き、適切なサービスを受けるためのポイントなど介護保険サービスの活用方法について解説していただきました。最後に、介護のつらさを感じる時は、ストレスの原因を知り上手にストレスを発散することや、介護に小さな喜びを見つけることの重要性を強調されました。

参加者からは、「介護の内容について具体的に理解することができました。これからも介護セミナーがあればよいと思いました」（教員）、「今後、家族や身内で現実として介護に直面する場面が出てくるかと思い参加しました。具体的なお話を伺うことができ、より身近になりました。様々なサービスを活用できることも知り、今後よく考えたいと思います」（職員）、「まだ身近には考える機会の少ない高齢者問題、介護の問題も分かりやすく説明していただきました。認知症の高齢者への理解ができるように努めたいと思います」（学生）との声が寄せられました。

当センターでは今後も、ワーク・ライフ・バランスを考えるために役立つセミナーを開催し、男女共同参画に取り組んでいきます。



介護者の心構え

- 現在の状態を正しく理解する⇒いつもの状態
- 加齢による身体の変化を意識する
- できないことばかりに捉われず、できる事柄に目を向ける⇒できない機能・できにくい機能でできる機能を確認し支援に繋ぐ
- リスクを予測して予防策を
- 介護される側の気持ちを察する
 - ・直接聞いてみる
 - ・言いたいことを我慢している場合もある
 - ・口に出せない気持ちを押し量る
 - 思いやりを忘れない

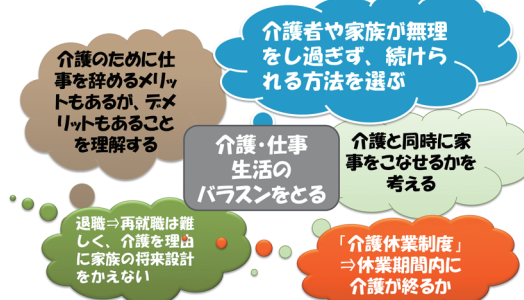


介護にまつわる5つの問題

事前に予防策を講じておく必要性

- 暮らし:** 親は、だれと、どこに住むのか
親と同居する家族がいる場合、その家族が中心となって介護する役割をつとめることになる
- 能力:** 親の身体の状況によって、必要なケアや援助の内容は異なる
介護サービスの利用を含めて検討するべき
- お金:** 医療費、介護サービスの利用料金、生活費など、親の生活に係るお金と収入を知り、不足分の補い方を考える
- 仕事:** 介護のための退職は、最後の手段に!
中心となっている介護をする人でも、できるだけ仕事と両立する方法を探る
- 人間関係:** 家族構成、居住地、収入、親との関係など兄弟・姉妹であっても事情は異なる。早めに十分は話し合いが必要

介護者と家族の生活を守るポイント





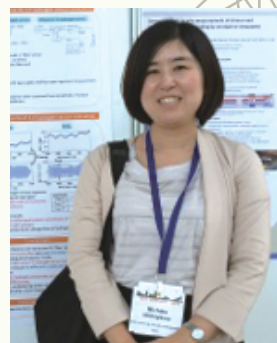
オープン・カフェを開催しました!



オープン・カフェは、本学の女子学生・大学院生を参加対象として、様々な分野で活躍しロール・モデルとなり得る多くの女性リーダーとの交流を通して、参加した女子学生一人ひとりが、将来、創造的人間として多種多様なジャンルでワールドワイドに活躍できるリーダーに成長していけるよう支援することを目的とした、当センターの重要事業のひとつです。

2015年度にも2回のカフェが開催されました。第1回(7月2日)は、本学理工学部共生創造理工学科の西山道子先生をお招きして、ワーク・ライフ・バランスについて、お話いただきました。西山先生にはご自身の大学院時代における将来の不安や教員を志した動機等についても話していただき、終始和やかな雰囲気のカフェになりました。続く、第2回(12月4日)では、本学経済学部の齋藤之美教授をお招きし、同じくワーク・ライフ・バランスについてお話いただくとともに、研究者という仕事の素晴らしさややりがいについて熱く語っていただきました。

毎回のカフェでは、出席した女子学生から、勉強、キャリア、将来の生活、生き方の心構え等、様々な質問が投げかけられ、講師の側も一つひとつの質問に誠実に答えていただいています。このカフェは、学生と教員という垣根を越えて、多くの女性がキャリアやワーク・ライフ・バランスに関する疑問・悩み・不安について忌憚なく話し合いが行える貴重な機会を提供するものになっています。



理工学部共生創造理工学科
西山道子先生



経済学部
齋藤之美教授

♪リーダーシップ・サロン♪

リーダーシップ・サロンとは、本学女性教員を対象として、大学におけるワーク・ライフ・バランスやリーダーシップの能力を向上・発展させることを目的として開催されている当センターの事業のひとつです。この事業は本学国際教養学部学部長のマリア・グアハルド教授が主導して実施されており、2015年度も5回開催されました。このサロンでは、毎回、女性に求められるリーダーシップのあり方や職場環境に関する様々な関連情報を出席者全員で共有し、各人が自らの体験や感想を述べる等、終始和やかな雰囲気で行われています。

2015年度に開催された各回の具体的なテーマと内容は、以下のとおりでした。第1回(4月27日)では、女性リーダーとして成功する習慣がテーマに取り上げられました。第2回(6月29日)では、デシジョン・メイキング(decision-making)のために自らの経験がいかなる効果や影響を及ぼし得るかをテーマに、白熱した議論が展開されました。前期授業終了後に開催された第3回(7月30日)のサロンは、大学を飛び出して、八王子駅近くのレストランにおいてリラックスした雰囲気のなかで開催されました。このときのテーマは、各人のリーダーシップ・スタイルについてであり、出席者それぞれの日常的な行動や習慣のなかに表れるリーダーシップ・スタイルについて、様々な角度から検証し合うことができました。後期の第4回(10月23日)のサロンでは、生活環境の変化とその動きに対応する戦略がメインテーマに選ばれました。年度最後の開催となった第5回(12月14日)では、職場の国際化と異文化の接触について話し合われました。この回には、いつも以上に様々な国籍の女性教員たちが参加していたため、非常に白熱した議論が展開されました。

創価大学学内保育所開設準備

現在、男女共同参画推進センターでは、仕事と子育ての両立を目指し、働きやすい環境を整備する一環として、大学キャンパス内に保育所を設置する準備を進めています（2016年9月開所予定）。

保育所の設置は創価大学がおこないますが、保育業務そのものは外部委託によって運営される予定です。大学教員だけでなく、受け入れ可能人数枠を調整して大学周辺など地域の方々にも利用してもらうことも計画しています。

保育所の定員、利用時間、利用手続きなどについては、現在、検討・準備中ですので、後日ホームページにてお知らせいたします。

ワーク・ライフ・バランス相談窓口

2015年10月1日、女性教員を中心に教員の皆さんの活躍をサポートし、就労・教育・研究環境を整備していくための一環として、「ワーク・ライフ・バランス相談窓口」が、スタートしました。介護の問題を含めて、仕事と家庭生活の両立に向けたワーク・ライフ・バランスや、女性のライフイベント（妊娠・出産・育児期の女性の健康問題等）に関して、気軽に相談できる体制が整いました。

教員の皆さんには、教育・研究活動、大学業務に、安心して取り組んでいけるよう、ふるって相談窓口を利用していただければと思います。

利用に際しては、男女共同参加推進センターのHPより、予約画面を開き、必要事項を記入・送信して申込みをする完全予約制の方式を取っており、利用者のプライバシーにも十分に配慮しておりますので、安心してご利用下さい。

本学の女性教員をはじめ、すべての教員の皆さんが生き生きと活躍し、教育と研究において、より良き成果を上げていけるよう、本センターとして、全力で、相談業務にあたって行きたいと考えています。

相談できること

- ワーク・ライフ・バランスに関する相談
- 妊娠・出産・育児期の女性の健康問題に関する相談

お申し込み方法（完全予約制）

- 下記 URL から予約画面を開き、フォームに記入後、送信してください。
<http://www.sankaku-center.soka.ac.jp/wlb-inquiry-counter/>

問い合わせ先

- 創価大学男女共同参画推進センター ワーク・ライフ・バランス相談窓口
E-mail : sankaku-center@soka.ac.jp

発行元：創価大学男女共同参画推進センター

<http://www.sankaku-center.soka.ac.jp>

発行日 2016年2月27日

センター長 花見常幸

センター員 浦上輝子 / 岡部史信 / 木下聖子フローラ / 小林孝次
小林光義 / 志村千鶴子 / ズルエタ・ジョハンナ / 竹田文久
飛田昌彦 / 長沼貴美 / 御崎由久 / 光永勝紀 / 森富士子
山崎めぐみ

問い合わせ sankaku-center@soka.ac.jp